

1
言語
言葉の力をつけよう (音読3年②) 〔和歌「小倉百人一首」〕
名前

★ 「小倉百人一首」は鎌倉時代に藤原定家が選んだものです。一二三五年ごろに成立したと言われ、それまでにうたわれた古典和歌のすぐれた和歌を、作者一人につき一首ずつ収めています。どれも和歌として優れているだけでなく、歴史的背景を探ると大きな意味をもつものばかりです。その選び方や、ならべられた順番にも意味があるとされています。和歌上の番号は、並べられた順番です。解説のプリントを読んでイメージをふくらませ、味わって読んでみましょう。

やってみよう

※ひらがなでルビを付けています。  
※歴史的仮名遣いの読み方はカタカナで書いています。

① 秋の田のかりほの庵イホの苫とまをあらみ わが衣手ころもでは露つゆにぬれつつ  
天智天皇てんじてんのう

《読んだ回数》

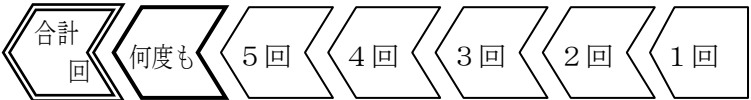
② 春なつきすぎて夏来なつぎにけらし白妙しろたへの 衣ころもほすてふ天ちヨウの香具山かぐやま  
持統天皇じとうてんのう

④① しのぶれど色いろに出いでにけりわが恋こいは 物ものや思おもふと人ひとの問とふまで  
平たいらの 兼盛かねもり

④① 恋ちヨウすてふわが名なはまだき立ちにけり 人ひと知れずこそ思おもひそめしか  
壬生忠見みぶのただみ

⑥① 大江山おほえやまいく野のの道の遠とほければ まだふみも見みず天あまの橋立はしだて  
小式部内侍こしきぶのないし

⑥① いにしへの奈良ならの都みやこの八重やへざくら けふ九重ここのへににほひぬるかな  
伊勢大輔いせのたいふ



★知っておきたい言葉の知識

「和歌」：日本古来の五音と七音をもとにした歌の総称で、長歌・短歌・旋頭歌などがあります。日本最古の和歌集として「万葉集」があります、最初の勅撰和歌集(天皇の命令で編まれた歌集)に「古今和歌集」があります。これに鎌倉時代の「新古今和歌集」をあわせて三大歌集と呼びます。三大歌集は和歌の歴史を知るのに特徴的な歌集です。

「小倉百人一首」：藤原定家の選んだ百人一首はほとんどが

勅撰和歌集から選ばれており、その歌を詠んだ歌人の生きた年代順にならべられています。

身に付けると…

作品が成立した時代の歴史的背景や昔の人々のものの感じ方・考え方を知ることができます。  
和歌の歴史を知り、表現の特色や味わいの豊かさを楽しむことができます。

読んでみよう

《口語訳》

① 秋の田に作ったの飯小屋で寝ていると、屋根や囲いの苦の編み目が粗いので、私の着物の袖は夜露に濡れ続けているよ。  
② もう春は過ぎ、夏が来たようだ。虫除けのために衣を日に当てるというが、その白い衣が天の香具山に見えることだ。

④① 心の中に隠してはいるけれども、顔色に表れてしまったなあ、私の恋は。「あなたは物思いをしているのですか」と人が尋ねるほどに。  
④② 恋をしているという私の評判は早くも世間に広まったことだ。誰にも知られないように、密かにあの人を思い始めたの。  
④③ 大江山を過ぎて生野を越えて行く道が遠いので、まだ天の橋立へ行って見たことはありません。もちろん、母の手紙も見えていません。  
④④ 昔の奈良の都で咲いていた八重桜は、今日は京の都この宮中で色美しく咲いていることだなあ。

《エピソード1》

④①の平兼盛の歌と④②の壬生忠見の歌は、天徳四年(九六〇年)三月三十日に行われた「天徳内裏歌合」での大一番でした。甲乙つけがたく判定に困った審判の藤原実頼が村上天皇をうかがったところ、天皇が低い声で「しのぶれど」の歌を吟じていたことから、兼盛を勝ちとしたそうです。壬生忠見は負けたことを気に病んでとうとう死んでしまったと言われています。『袋草子』より)

当時の歌人にとって内裏で行われる歌合がどんなに大事なものであったかが分かりますね。歌合の結果は勅撰和歌集を作るときの参考資料にもなったようです。

《エピソード2》

④③の歌も歌合をめぐるエピソードをもっています。

《エピソード3》

小式部内侍は当時の有名な歌人、和泉式部の娘でした。京の都で歌合に出場する小式部内侍が、他の参加者から、丹後にいる母に頼んで代作してもらったその歌は、手元に届きましたかとかかわれて、即座に返した歌です。  
「生野」と「行く野」、「踏み」と「文」を掛詞にし、倒置法で強調し、体言止めで余韻を残しています。歌枕を「大江山」「生野」「天の橋立」といくつも読み込み、技巧を駆使しながら、代作疑惑を一気に否定することのできる説得力のある歌でした。『十訓抄』より)

④④の歌は、奈良から献上された桜を宮中に取り入れる役を紫式部から急に譲られた伊勢大輔が、藤原道長の前で見事に詠んだ歌です。「今日」と「京」、「九重」と「この辺」が掛詞になっています。『詞華集』より)